

米国向けミサイルを迎撃？ 集団的自衛権議論の虚構

グアム周辺に向けた「火星 12」の発射検討、との北朝鮮側の報道が9月9日と10日にありました。これに対し、「小野寺防衛相は10日、北朝鮮が日本上空を通過して弾道ミサイルを発射した場合、安全保障関連法に基づき、集団的自衛権を行使して迎撃する可能性に言及した」（読売新聞）と報じられました。しかし、現在イージス艦に配備されている迎撃ミサイルSM3ブロックIAでは、グアム向けミサイルの日本上空通過時の高度に届くことができません。

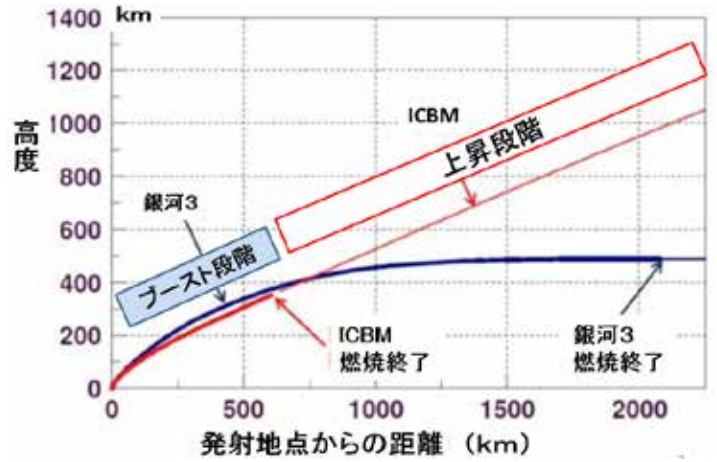


安保法制の議論で忘れられた「技術的問題」

第一次安倍政権時代の2007年、「技術的な問題は別として、仮に米国に向かうかもしれない弾道ミサイルをレーダーで捕捉した場合でも、我が国は迎撃できないという状況が生じてよいのか」という検討課題が「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」（安保法制懇）に与えられました。首相辞任後の08年6月に出された同懇談会報告書も、第二次安倍政権で復活した懇談会による14年5月の報告書も、集団的自衛権を容認する憲法解釈変更により迎撃を可能にすべきだというものでした。

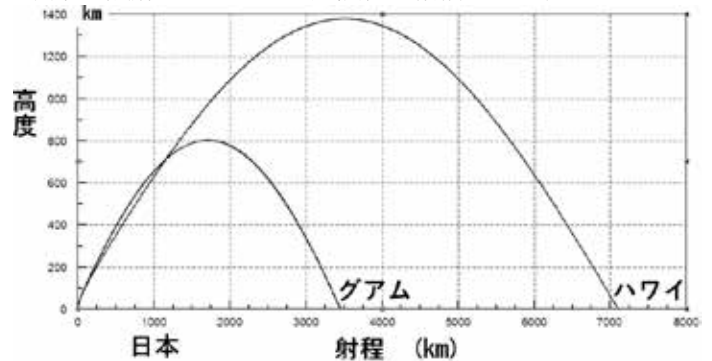
小中学校や報道で見る地図だと日本の右に位置する米本土に向けたミサイルは日本上空を通過しそうな気がしますが、実際は、丸い地球の最短距離に沿った「大圏（大円）コース」を飛ぶため、上の地図のような軌跡となります（米国NGO「憂慮する科学者同盟（UCS）」のミサイル問題専門家デイビッド・ライトが核情報用に作成）。

ライトの右上の図は、2012年の人工衛星打ち上げに使われた銀河3号と射程1万2000kmの液体燃料大陸間弾道弾（ICBM）の初期の軌道の違いを示したものです。核情報の質問に答えてライトはブロックIAについてこう言います。「SM3はブースト（加速）段階での迎撃を目指すものではない。加速する標的を追うだけの機動性を持っていないからだ。だから、SM3が発射地点の近くに配備されている場合、相手のミサイルの燃料燃焼終了（バー



ンアウト)まで待ってから、上昇段階で迎撃を試みることになる。ICBMは、燃焼終了頃には、高度も発射地点からの距離も数百キロメートルに達している。そしてSM3よりもずっと速い速度で飛んでいる（秒速7km vs 秒速3km）から、追いつくことができない。発射地点からずっと離れた地点で待ち構えて、迎撃ミサイルを発射し、横から弾頭を狙い撃ちしようと試みても、弾頭に到達できそうにない。秒速3kmの迎撃ミサイルは、高度400～500km以上には到達できないからだ」。

日米共同開発の到着高度1400km、秒速4.5kmのブロックII Aだとかどうか(今年2月4日に最初の迎撃実験に成功、6月21日の2度目の実験は失敗)。「発射地点から十分に下がって迎撃ミサイルを発射すれば上昇段階での迎撃の可能性が高まってくる」が中口上空というコースのため、イージス艦の置き場所がないとライトは指摘します（左の図のように船を陸に?）。「西海岸向けは海岸線に近いから[沿海州沖の船から]撃てる距離にあるようだ。だが、中口に向けて迎撃ミサイルを発射すれば両国の陸上に破片が落下することになる」。ライトはさらに両国に対する攻撃と誤解されてしまう危険性を指摘します。



グアム・ハワイ向けのミサイルを迎撃？

ライトは上の図を使ってこう説明します。「日本は、約1000kmの距離にある。どちらの場合も、この時点で弾頭が高度600～700kmにある」。日本のイージス艦が日本を防衛すべく日本沿岸にしているとすると、ブロックIAでは撃ち落とせないということです。ブロックII Aならちょうどいい位置に船がいれば迎撃の可能性が出てくるが、米国の船をグアムやハワイ側に置いて構えた方が迎撃の可能性が高まるというのがライトの答えです。

（「核情報」主宰 田窪雅文）